

3 イチゴのランナー子株貯蔵及び活着促進技術

ねらいと成果

イチゴは、他の果菜類に比べ定植株数が多く、育苗時の作業集中が経営規模拡大の妨げとなっている。そこで、空中採苗における採苗・仮植作業の分散及び作業期間の拡大につながる、ランナー子株の貯蔵及び貯蔵後のセル成型育苗における活着促進技術を開発した。これにより生産者の経営規模拡大が可能になるとともに、時期をずらして冷蔵すると病虫害などのリスクが低下して種苗生産者の参入も容易になり、イチゴ育苗の分業化にもつながる。

内容

2～3葉期の子株を、1株ずつ切り離すと小さいスペースで貯蔵でき、その保存性は切り離さない場合と同等である。280×400mmのポリ袋に120株程度詰めると直方体に近く取扱い容易で、外寸524×365×h309mmのコンテナに10袋前後入る(図1)。

切り離したランナーは、速やかにポリ袋に向きを揃えて入れ、葉が上になるようにコンテナに詰めて、冷蔵庫に入庫する。冷蔵温度が高いほど貯蔵中の苗の劣化が早いため、-2～0℃で温度管理する。約2か月間は、葉やランナーの褐変、挿し苗後活着率低下などの障害発生を抑えて貯蔵できる。(図2)た

だし、貯蔵期間が長いほど開花期が遅れるため、定植用苗を育成する場合の冷蔵は1か月までとする。

出庫後は、直ちにセルトレイに挿して十分にかん水し、遮光率30%程度の白寒冷紗及び冷房機(昼25℃、夜20℃に設定)を設置したハウスに搬入し、細霧システムで葉水を与えて管理する。盛夏期では約2週間程度で根鉢が形成される。活着までは底面給水装置を利用し、品種や時期によって3日～7日に1回程度かん水すると活着もよく、省力的である(図3)。

普及上の注意事項

採苗後は、水につけずに直ちに冷蔵庫に入れる。

山本 晃一(農産園芸部)

(問い合わせ先 電話:0790-47-2423)

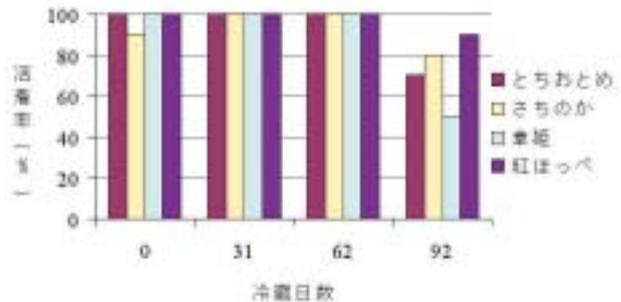


図2 ランナー子株の冷蔵日数と活着率
(注) 子株採取日: 冷蔵日数0日区のみ2007年6月9日、他は5月9日



図1 作業の流れ

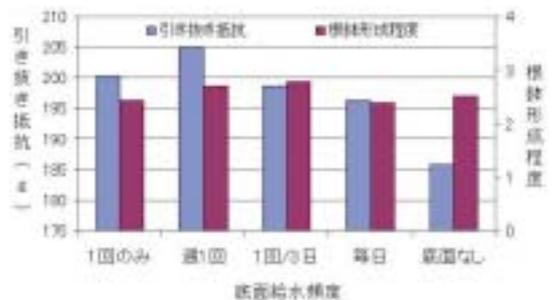


図3 底面給水頻度と活着(章姫)
(注) 1 各区とも、細霧による葉水処理、白寒冷紗被覆、冷房を行った
2 底面給水頻度 1回のみ: 挿し苗当日に1回のみ
底面なし: 底面給水に代え手かん水で調節
3 根鉢形成程度: 0(新根発生なし)～4(根鉢が完成し崩れない)
4 挿し苗日: 2008年10月10日、調査日: 2008年10月27日